

私と釣り

長田 豊臣
●立命館理事長

私の釣歴は長い。子ども時代、九州大分・国東半島の山の中で育った私には、釣りは毎日の生活の中で重要な部分を占めていた。国東半島のほぼ真ん中に、山岳仏教で知られた両子山というかなり高い山がそびえており、その山から海へ向けて流れ落ちる何本かの川に沿ってそれぞれ集落があるという地形で、子どものときから川は重要な遊び場であった。

そのころの田舎は自給自足が当たり前で、釣り竿は自分で裏の竹やぶで適当な竹を切ってきて、もみ殻に火をつけてその中に突っ込んでいぶし、水分を乾燥させ、同時に竹を釣り竿になるように真っすぐに矯正する。また、釣りに

糸もビニールのテグスなどは当時の子どもの手にはなかなか手に入らない高級品なので、針回りの一メートルくらいはビニールのテグスを使い、上のほうは母親の裁縫箱からくすねた木綿糸という具合であった。しかし、それで十センチか十五センチのハエ(ヤマバエ)がけっこう釣れた。

特に今でも思い出すだけで興奮するのだが、五月には畑のキャベツにつく青虫がこれはすばらしく効果的なエサとなった。普通には台所の流しの水の落ちるところにシママミズを飼っておき、それを使った。それこそ大雨か台

風のとき以外、学校から帰ると鞆はほり出して目の前の川で日没まで釣りに興じた。何とも充足した子ども時代であった。

のちに京都の大学を卒業して母校の助手に採用され、わずかながらでも定まった収入が入るようになると、早速今度は、子ども時代手の届かなかった海釣りに夢中になった。夜の十二時ごろに大阪の天王寺駅を出る夜行の普通列車に乗ると、明け方には紀伊半島先端の潮岬に到着する。すぐその足でタクシーを駆って海岸に走り、待ち構えている渡船に乗り換え、沖合いにある

釣果の実績ある岩礁の上によじ登る。

しかし、最初のころはかなりのんびりしていた渡船も、しだいに海釣り人口が増えたせいもあってか、だんだんとせち辛くなっていった。実績のある岩礁の数は限られるので、ついには釣り客を満載し、笛を合図にそれぞれの目的の岩を目掛けて突進し、釣り客は先を争って場所とり合戦を繰り広げるといった味気ないものに変化していった。それに一度一つの岩の上にとると、夕方に船頭が迎えに来るまでそこに足止めされる。しかも、岩の上はまきエサに使う小エビなどが散乱し、悪臭を放つ。そのうえ、そのころの釣り客は、どういうわけか柄の悪い人が多く、場所をめぐる小競り合いが絶えない。あれやこれやの理由で海釣りがすっきりいやになって、しだいに溪流釣りに転向していった。

今から三十年ほど前の京都はまだのんびりしていて、ひと山越えた後背地

の川でゆったりと新鮮な空気を吸いながら緑を満喫する釣りは、心の洗われるような時間であった。しかし、何と言っても釣果は限られ、釣れる魚（主としてアマゴ）が小さいのに満足できず、山岳部のOBに連れられて九頭竜川の源流部に通うことになる。

九頭竜川の源流部の釣りはダイナミックなものである。使う釣り糸も溪流釣りでは普通考えられない太い糸で、釣れる魚（源流部ではイワナが主流になる）も、三十センチを超えるいわゆる尺物となる。下手をすると高価な竿を簡単に折られる。シーズン最盛期には週に一回、こまめに通い詰める年が何年も続いた。しかし、源流部にたどり着くには、二、三時間登山よろしく厳しい山道を登らなくてはならない。

体力派の私にも、さすがに七十歳を過ぎるときつくなってきた。しかも源流部でけがですると、ヘリコプターも入れない山奥なので、大学に迷惑を

かけることは避けたい。そこで、長年の念願であった優雅なフライフィッシングに転向した。しかし、日本の川ではなまじかのテクニクではフライで魚は釣れない。そのために、昨今は釣りよりもフライを作ることには熱中している始末である。しかし、漁師ではあるまいし、いつまでも数ばかりにこだわるのはやめようと自分に言い聞かせている毎日である。

